

I 家庭科における自律した学習者の姿

- 科学的な目で生活を見直し、五感を働かせながら得た知識や技能を支える背景や意味を探っている姿
- 自分の生活をよりよくするための方法を選択・決定し、獲得した知識や技能を自分の生活の舞台へ広げていく姿

II 授業デザインの取組

- 日常生活に必要な知識や技能を支える背景や意味にこだわりをもって探究できるよう、吟味し直したりやり直したりする自由度を保障した実験の工夫。
- 多様な視点から自分の生活を見つめ直し、これからの生活をよりよくしたいという意識につながる選択・決定を積み重ねていくことができる単元を構想、展開する。

III 1年次に生成した仮説

1 成果

お世話になった先生方にクッキーを焼いていたときの焦げた部分が気に入り、その原因を探り試行錯誤し、よりよいものを目指そうとする姿



活動自体を一回限りだったり時間で区切ったりすることを極力控え、失敗してもやり直すことができる場を保障した。失敗したらやり直し改善していく体験を積み重ねていくことが学びの安心感につながっていくという気持ちで子どもを見取ったこと。

6年「感謝をかたちに」は、卒業を目前に抱く感謝の気持ちを家庭科で学んだことを活かしながらかたちにしていく活動である。チョコチップクッキーを作って6年部の先生たちに感謝を伝えたいと企画した男子3人組の追究は進んでいった。「オープンやトースターを使わずフライパンで作れないだろうか」という課題を掲げ何枚か焼いてみるのだが、確実に焦げてしまい原因を探っていく。焦げたクッキーはフライパンのどこに置いたときだろうか、繰り返し焼いてみることでフライパンの熱伝導を考えフライパンの真ん中を避けて焼いてみることでようやく解決にたどり着いていった。十分な成功と思いきや、次は生地の高さと食感との関係性に追究の目は向いていった。この子どもたちの追究に対する根気強さは、「感謝」というテーマに沿ってよりよいものを目指したいという学びの欲求に支えられている。そして、何より失敗から学ぶ要素が大きいことを実感しているからこそ、失敗したらやり直せばいいという学びへの安心感に支えられ、あきらめずに追究していくのだと感じた。

活動を「気付いたこと」「驚いたこと」「感動したこと」の視点から振り返り、次時の学習課題が明確になり真っ直ぐに追究していく姿



何を確かめたいのか、何に不安を感じているのか子どもと対話しながら一人一人の学習課題がその子どものもものになっているかの吟味をしたこと。

学習課題に向かって学びに没頭している子どもの姿を見ることができた。学習課題がその子どものもものになっているかどうか没頭へつながる道だと考える。振り返りをもとに、何を確かめたいのか、何に不安を感じているのかを子どもとの対話をしながら追究の根っこをあぶり出してきた。ときに「おいしくなるように工夫したい」「きれいになるようにしたい」といった具体性には遠い学習課題も目にする。しかし、その具体を問いたくもなるが「お試し」をして気付くこともあるのだという学びへのゆとりを教師自身ももっていく重要性を感じる。子ども自身が試行錯誤していく中に気づきや驚き、感動が自覚化されたとき、自ら考え選択し、実行したときの学びには納得度が生まれ、初めて家庭科の資質・能力が身に付いていくのだと考える。

2 課題

子どもの言動と学びの背景とをつなぎ合わせながら子どもの学びの姿を見取っていくことを大切にしてきた。何に気づき、何に驚き、何に感動しているのか、子どもの気づきに気付くライブ感意識を研ぎ澄ませながら授業を創造する繊細さを教材研究に組み込んでいきたい。

研究の実践

1 6年 題材「感謝をかたちに」

2 授業の実際

(1) 失敗が没頭を支える

思えば「クリーン大作戦」の学習が発端だったのかもしれない。失敗こそが学びの欲求につながる感覚が子どもたちに根付き始めたのは、玄関前の廊下掃除を担当したグループが床の黒ずみを洗剤を使って見事に綺麗にし、汚れが取れたことへの満足感と、いいことをしたという充足感に浸っていたところに、「汚れが酷い」というクレームが立て続けに入った。現地では「ねばねばしている」「黒い足跡でいっぱい」という目も当てられない状況。聞くところクリーム状の洗剤を1本全て使いきったと言うのだから、大笑いしてしまった。子どもたちは、しっかり洗剤を洗い落としていなかったこと、適量以上の洗剤を使用していたことが失敗のもとだったと気付く場面となった。やり直しの掃除は、新たな改善への道を探る場となった。「感謝をかたちに」の学習で「校内そうじ」の子どもの振り返りが印象的だった。

洗剤はスポンジに1滴で十分泡立った。友達失敗は僕たちを救ってくれた。失敗から学ぶことって大きいと実感！失敗は次に活かせばいい。

今回、チョコチップクッキーを作って6年部の先生たちにこれまでの感謝を伝えたいと計画を立てた男子3人組の追究は「オーブンやトースターを使わずフライパンでチョコチップクッキーを美味しく焼くことができるか」である。A児は家で実践してみたのだが、家ではIHなのに対し学校はガス。フライパンも家と学校では勝手が違うことに不安を抱いていた。何枚か焼いてみるのだが、確実に焦げてしまい、その失敗の原因を探っていった。感謝を伝えるクッキーであるのでこのままでいいはずがない。焦げた部分が多かったのはフライパンの真ん中に置いたものかもしれないと予想を立て、フライパンの真ん中を避け周囲に並べて火加減に注意しながら焼いてみることにした。焦げ目は減ったので十分成功と思いきや、次は食感に追究の目が向けられていったのである。「もっと外側はカリカリ、内側はもちりさせたい」よりよいものを目指したいという欲求は、あきらめたくないという学びへのこだわりの表れに思えた。子どもたちの中にどこか『失敗してもやり直せばいい』『失敗から学ぶ要素が大きい』という安心感が支えとなり、学びに向かう明るさに通じていったのではないかと思えた。失敗したらやり直し改善するという体験の積み重ねから、

(2) 明確な学習課題が没頭をつくる

この時間は、何を追究するのか。子ども自身に明確な学習課題があるとき、学びに没頭する姿を目の当たりにした。

カーテンの汚れや匂いが気になってはいたけれど、まさか28年間一度も洗っていないとは…と子どもたちの驚きは想像以上であった。思い出の学校のために「カーテンを洗濯したい」という気持ちはあるものの二の足を踏んでいた子どもたちから出た不安はそのまま追究の目になっていった。

- ① 「防炎」というマークが付いているが、洗濯機で洗濯できるのか。
- ② どんな汚れが付いているのか。
- ③ 「ドライ」の洗濯の仕方はどうしたらよいか。
- ④ そもそも洗濯機にカーテンは入るのか。

上記の4つについて、調べたり、屋内塵性ダニ簡易検査キット「ダニスキャン」を用いて実験したり、お試しの洗濯を試みたり、追究の目は授業が進んでいくにつれ探究心をくすぐっていった。「きれいになるようにするにはどうしたらよいか」「おいしくなるようにするにはどう工夫したらよいか」という大枠な学習課題に比べ、何を追究するのか子ども自身に明確な学習課題があるとき、追究の意欲が掻き立てられていく。学習の振り返りには、活動の中で気付いたこと、驚いたこと、感動したことを中心に記述してきた。その中で、何を確かめたいのか、何に不安を抱いているのかがあぶり出され、追究の具体が次時の学習課題へとつながっていった。

カーテンを洗濯していた子どもたちから「洗濯後のカーテンは香りもいいし明るくなった気がする。その分、金具の汚れが気になり洗うことにした。」という振り返りの記述があった。活動のきっかけが後輩や先生たちに健康で安全に過ごして欲しいという願いだった子どもたちは金具を1個ずつスポンジで洗っていた。「金具の輝きが違うね」という私からのコメントを読みつつ「これでは時間がかかりすぎる。いい方法はないかなあ。」というつぶやきが重なった。「金具が洗えるミニ洗濯機があればいいのにね」何気ない会話であったが、使い捨て手袋に水を貯めて楽しんでいる友達の姿からヒントを得たB児は、ビニル袋に金具と水と洗剤を入れ、もみ洗いを始めた。洗濯機や手洗いそれぞれのよさをふまえて、汚れを取るよりよい方法をあきらめずに追究していく子どもの姿こそ学びに没頭する姿であった。子どもとの対話の中で、何を確かめたいのか、何が不安なのかを整理していくうちに子ども自身が解決方法を手繰り寄せていくことがある。学びの矛先を選択・決定するのは勿論子どもであり自ら考え選択・決定し実行したときに初めて学びが身に付くと思うほどに、子どもの気付きに気付きをもち授業を構築していく柔軟性を意識し授業を創造していきたいと強く思った。